

---

# 廻る世界で

ザツザツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
廻る世界で

【Nコード】  
N2186U

【作者名】  
ザッザッ

【あらすじ】  
非常識を望まぬ主人公アユムが非常識な世界につれていかれるあ  
りきたりなお話

## プロローグ（前書き）

思いつきで書いたので更新は未定っていうか続かないかも

## ブログ

side・歩

俺の名前は破坂 歩。

何気ない日常。 平穏な毎日。  
特別伝えるべきことのない日々

俗に言う、ありきたりの毎日で退屈な現実というやつがとても気に入っている。

神山高校二年生だ。

それでも帰国子女だぞ？

幼い頃は（義理の）両親と姉と共に海外にいて、ピアノをやっていた。  
腕前は『神の旋律』と言われるほどだ。が、大きなリサイタルは、やったことがない。

正直俺は大きなリサイタルが好きではない。

ただ俺は、お金をとって発表するんじゃないで、聞きたいと言う人を集めてみんなで楽しくやりたいんだ。

だが、俺の意見を親父は反対し喧嘩になった。

それも殴り合いの喧嘩だ。

幸い俺は武術全般も極めるとまではいかないまでも有名になるくらいに上達してたから一方的にやられるようなことはなかった。

そして、親と別れて日本で暮らすようになったのが二年前。

その二ヶ月後に姉さんも家を出て日本で暮らすことになった。

（原因はやっぱり親とのケンカらしい）

そして現在とても平穏な日常を送っている。

この日常が変わらないことを祈る今日この頃であった。

まどろみの中まるで浮いたような感覚になった。

回りを見渡せば白一色で、前後左右の感覚など望むべくもない場所

だった。

——殺してやる

そんな白一色の世界に一つの黒点ができた。

——殺してやる

それは憎悪と殺意の塊のような——いや、ようなというより正しく、憎悪と殺意の塊だった。

何が憎いんだ？

——殺して、やる

だから何が？

——私をここに閉じ込め憎み蔑んだ有りとあらゆる全ての人間を殺シテヤル！！！！

なんだそんなことか。

——ナニ？

俺は、別に構わないが俺の日常を巻き込まないでくれよ？

アンタはアンタだ好きなようにすればいいさ。

——私はスベテヲ殺スゾ？ソレデモカ？  
構わないさ

俺の日常にお前みたいなのやつは存在しない、なら俺の存在しないで  
こかのお前の日常なんだ好きにしてくれ。

——私の好きに？

ああ。

——私の日常？

ああ、そうだお前はお前の日常を謳歌してくれ。

それじゃ、もういいだろう？俺は今昼寝がしたいんだ。

——その願い叶えてやろうか？

ああ、頼むからさっさと消えてくれ。

夢だとしてもクドイ夢だ

——わかったわ、その代わりに…あなたには私の——に  
——ってもらうわ。

なに？

——契約は成立した、あなたは選択を迫られたときどんな答えをだすのか——またいずれ私の世界で——

そう言っただけがわからないやつは、わけがわからないことを言っ  
て、わけがわからない内にどこかに消えていった。

変な夢だ、姉さんのせいで心労でも貯まっているんだろうか？

あれか？昨日料理で塩と砂糖を間違えていれてしかもその量が一袋  
分だったことか？

それとも職場の返りに飲んで酔って帰ってきたとたん愛という名の  
（というのは本人の談）鉄拳制裁をされたことか

嫌だな、この歳で精神科いくの。

そんな下らないことをかんがえているうちに意識が浮上し——

キンコンカンコンコン——

授業終了の鐘がなった。

「やっと授業終わったか？」

この頃陽射しが春と夏の間くらいで程好いため俺は現在、授業をサバタージュ中で屋上で日向ぼっこしている。

キンコンカンコーン！キンコンカンコーン！

「二年A組！破坂歩君！！二年A組！破坂歩君！！至急職員室に来なさい！！！」

現在、絶賛咆哮中の人は

【芳乃結衣先生】

22才独身

人気上々の熱血派の先生で

この学校で唯一俺に関わってくる人だ。

「どうするかな……………まあ、いつか」

別に行ってもいいことないし放っておいても問題ないだろう。

「そうと決まればもう一眠り……………」

心地の良い眠気に身を任せ

「お休みなさい。」

礼儀ただしく一礼して

さあ寝よう。

ボタンー！

「破坂君いる！！？」

俺の考えが甘かった。

この先生一年間も付き合っていたのだから俺の寢床など熟知している。

そろそろ新しい寢床を開発しないと駄目かな？

「Good morning結衣先生？」

「グッドモーニングじゃ、ありません！さっき吉岡先生から今日も授業に出てないって苦情が来てましたよ！！」

ああ、あの先生が俺と関わるのが恐いからって結衣先生に言いにくなんて……とっちめるか？

「とっちめなくていいです！」

……心を読まれたようだ。

短い期間でここまで深い付き合いをした人があまりいないから、なにかとやりづらい。

「いつもテストも満点だ」

「単位落としますよ？」

「それも大丈夫。ちゃんと対策をうつてある。」

「そういうことじゃなくて」

キンコーンカーンコーン

「じゃあ、時間だから教室に戻る」

「あ、ちよつと！待ちなさい！」

「あ、そうだ。はい、今日の弁当。力作だから。」

そう言つて結衣先生に弁当を渡す。

「うっ、ありがとう。」

これもいつものやり取りである。

以前、顔色が悪く（後で聞いたがなんでも無理なダイエットのし過ぎなんだとか）倒れているのを発見し弁当をあげ、味が気に入ったのか知らないがダイエットに良い弁当をつくってくれと突拍子もないことを言ってきた。

（まあ、それを後悔したのか後で謝罪してきたが。）  
それからダイエット弁当をつくるようになって ■キロのダイエット

に成功した今も弁当をつくっている。

これをサボリが見つかって叱られているとき渡すと、申し訳なく思うのか一瞬口ごもってしまう。

だったらもらわなければいいのでは無いかと思うのだが、そこは持ち前の律儀さから、せっかくつくって来てくれたのに断るのは申し訳ないと思うのか結局口ごもってしまう。

だからその一瞬の隙について教室に戻る。

（だけど昼食が終わった時間に見つかるとその前の時の説教がプラスされるから、俺は見つからないように結衣先生は見つけようとお互いに必死だ。）

とっておきの場所も以前に見つかったし、さてどうしようか？

『さっき吉岡先生から今日も授業に出てないって苦情が来てましたよ……！』

「……………仕方ない、今日は授業全部受けるか。」

はあゝめんどろつだな。

× × × × × × × × × × × × × × ×

side・結衣

「ふゝ、もう。」

あんなに感情を表せるのにどうしてクラスに馴染めないんだろう。

「私クラスの担任として失格かな。」

舞さんになって言ったらいいのか。

はあゝ

いやいや、ネガティブになっちゃ駄目よ！

私がなんとかしなくちゃ。

あの子だって悪い子じゃないんだから、きっとなんとかなるわ！

あのとときだって。

「一年前」

仕事で少し遅くなってしまう、それで電車の終電に乗り遅れそうになったから裏道を通ることにした。

だけどそれが間違いだったとすぐに気付くことになる。

「えっ――」

コレハナンド？

それは私にとっての非日常。

コレハナンド？

少なくとも今まで生きてきて見たことなどなかった。

コレハナンド？

いや、普通はないだろう。

しかし私は以外にも冷静に死んでると判断できた。

イッタイコレハナンド？

なぜなら上半身の原型を止めてはいなかったから。

叫ぶことすらできなかった。

そこには無惨にも人からただの■ ■に成り果てたものがあった。

ああ、理解した私は人殺しの現場に居合わせてしまったのだ。

「とにかくにげなムグ!？」

すると、突然背後から口を押さえつけられた。

「——見たな？」

マズイと思った。

次にチャンスだと思った

それでも武道はそれなりにできる。

一人だけならばなんとか

今ならミゾを肘打ちして全力で走ればなんとかなると生存本能が頭の回転を促進させ、見いだした確かな希望だった。

そうこの場にいたのが“一人だけ”ならば

「おい、なに——ちっ、見られたのか？」

「ああ。」

さらに一人増えた。

心が絶望に染まる。

マズイ、マズイ、マズイ、マズイ、マズイ、マズイ、マズイ、マズイ

「ちょっとやめなさい！」

声が出せただけでも奇跡だった。

「ちっ、静かにしろよ！」

「おい、早く眠らせて運ぶぞ！」

「いや、待て。これだけいい女なんだ海外に高く売れるぞ？」

「へへへ……じゃあ売る前にちょっと賤なきゃなあ。」

「フ、そうだな生きがよすぎても売れないからな。」

リカイデキナイナニタイトルノ？

そのときの男の顔が凄く怖かった。

この後自分はどうなるんだろうか？

一体どこに連れていかれるのだろうか？

私は…死んでしまうのかな？

こんなやつらに弱いところは見せてはいけない。

わかってる。わかってる。理解してる。

だけど……つい口からもれてしまった。

「誰か…たす…けて…誰か…」

しかしその言葉は虚しく、空に消えるのが運命。

求めても虚しくなるだけなのに言うしかなかった。

しかし結衣は何かを怨むことだけは最後までしなかった。

神のせいにもしない

運命だったのだ、こうなるべくしてなった。

ただそれだけだ。

「おい、さっさとこい」ドゴッ——ガッア!？」

——ならば

「な!？おい大丈夫が?!ちつ、てめえ!この——」

バキッ!

——彼女が救われたのも、また運命だったのだろう。

「……はあ、たった一発で伸びるか普通?これなら不良のほうが、まだ骨がある。」

少年はなんでもないこの様に言う。

彼女は啞然とするしかなかった。

今の出来事が非日常なら、その助けしてくれたのが自分が受け持つク

ラスの生徒だったというのも、また非日常だった。

「大丈夫かアンタ？」

そう仏頂面で聞いてくる。

「えっ、あっ……………」

求めた思いが誰かに届いた。

それが何よりも嬉しかった。

自分の生徒という日常が助けに来てくれて何よりも安心した。

だから自然と

「うわあああん、あああん」

人生で初めて嬉しくて泣き崩れた。

体裁だとかプライドだとかそんなものを何一つ気にすることなく泣き続けた。

すると先程までなんの感情も出さなかった少年が慌てて私を諭していた。

それが初めて見た彼が感情を表したときだった。

結局その後で警察に行き男二人は捕まり牢屋行き。

（残虐性が高いため生きてるうちに外に出てくることはないそうだ）

私は終電がなくなり破坂くんの家に泊めてもらいそこで家の事情や彼の人柄を知った。

それにその日に男性恐怖症もなりかけたのも彼に治してもらったのは彼には秘密だ。

「現在」

「フフ、あのときの慌てようは凄かったわね。」

まったく…彼には今も助けてもらってばかりだ。

なんとか彼には楽しい青春を送ってもらうんだ。

「これでお仕舞い！」

放課後仕事を早く終わらせ帰ることにした。

ただどころもないしな〜う〜ん？

と、考えてると名案が浮かぶ。

そうだ！たまには彼の家に家庭訪問しにいくのも悪くないわね？

いつもお弁当作ってもらってばかりだからたまには私が晩御飯を作  
つてあげるのも悪くはない。

いつもは舞さんの分の料理も一人で作っているっていうし………舞  
さんには悪いが彼女は必殺料理人の異名を持つことから破坂家では  
料理全面禁止令が歩君と私によって公布された。

よし！いいかんがえだ、そう思い校内を探し回る。

「あれ？いない靴はあつただけだな〜」

このとき、私はいいような不安に襲われた。

「ねえ？破坂くんいる？」

そして数日後、私は知ることとなる。

「おい破坂くん」

彼がこの学校、いやこの世界から失踪したことに――

## プロローグ（後書き）

どうだろうか

正直始まりっぱくなかったような

## 強きものの世界（前書き）

連続投稿

## 強きものの世界

s i d e ・ 歩

パチリと目が覚めた。

そして視界に広がる青い空に白い雲。

学校にいたはずだとがどうして外にいるんだろうなどという疑問点は後にして。

ここまでが俺の見知った景色

そしてそれより遙か遠くにそびえ立つデカイ城？

うん、おっかしいな。

お酒とか幻覚作用のあるものを口にした覚えもないんだけどな

んゝと唸り何があったか順番に思い出す。

放課後校内に寢床探しの旅に出たんだっとな。

そして誰も使っていない地下室を発見した。

そこはちいさな隙間から射し込む光りがとても幻想的で綺麗だった。

俺はそこを気に入り手入れを始めた。

すると古いマットの下に変な紋様があった。

「なんだこれ？」

それに触れた瞬間光りに包まれて、気がつけば此処にいたと。

「……………別にこんな摩訶不思議な体験がしたかったわけじゃないんだけどな……………はあ……………」

もうため息をつくしかない。

それ以外に現在重要なことはない。

「とりあえず、少し歩いてみるか。」

こっちに來れたのだから帰ることもできるだろう。

案外簡単に帰る方法が見つかるかもしれないし。

「夢なら早めに覚めてくれよな？」

そう言つて歩は遠くからでもわかるほどに大きくそびえる城を睨み、歩きだした。

××××××××××××××××

side・結衣

彼、破坂歩くんと隣のクラスの二名の生徒が行方不明になった。

その二名は一年生のころの生徒だった子で面識もある。

最後にいた場所は校内のどこか

それはわかっている。

靴があるのだから当然だ。

なら校内の何処にいるというのか？

教室、図書室、保健室、体育館と、校内を探し回ったが見つからない。

今日は警察が来ての事情聴取があった。

私はそれが終わった後も校内を探し回った。

理科室、職員室、家庭科室化学準備室、ありとあらゆる可能性を考慮して探したが見つからない。

「お願い……出てきて…出てきてよ…破坂くん……出てきてよう…」

私は今日も探し回る。

この世界にいない人を

この世界で。

x x x x x x x x x x x x x x x

side・歩

さて、村らしきところについたのだが少し困ったことに気づいた。

「言葉通じるか？」

一応外国語もできるが、それこそ古代の言葉だとかなら、そこでジ・エンドだ。

そんなの話しかければ一発で答えがでる。

行動には結果が伴われる。

ならば、その結果を恐れて行動は起こさないという手段もあるが、残念ながら現状そんな現実逃避は己の首を絞める結果にしかならな

いので自ずとやるべきことがわかる。

ちょうど、そこで村人らしき人が来た。

「あのすいません？」

「はい？」

良かった日本語で通じるみたいだ。

「ああ、君異世界の人だね？」

そしていきなり大本命の話が出た。

「ああ、そうなんだ。どうしたら帰れるかしらないか？」

期待に胸が膨らむ。

少なくとも過去か現在かは解らないが、俺の世界の人間が来てることは確かだな。

「さあ？異世界から来た人は皆というか今は二人くらいしかいないんだが、箱庭に連れていかれたんだ。」

そう言っておじさんは人差し指を城があるところをさす。

「あれはなんなんだ？」

「ありゃあエリアス城と神の箱庭だよ。」

「なんだそれ？」

「そうだな、簡単に説明するとこの国を納めている女王様の城とそこで経営している学校だな。」

「なんでわざわざ城の中に学校をつくるんだ？」

「その生徒はな、神に選ばれた特別な人間なんだとか。それで特別な能力とか神剣とかいうのを持っている。その能力は凄まじく、学園は魔法協会や超能力騎士団に勝る力をもっている。でいざとなったら生徒達を戦わせるんだらう。」

「……腐ってやがる。」

「まあまあ落ち着け今の時代じゃ、戦争なんか起こらないさ。」

「なんでだ？」

「3000年前から、国と魔法協会と超能力騎士団手を取り合っているから戦争になんかなりやしないよ。ただ一応念のために一番の武力を近くにおいているだけさ。」

「……そうかそれで異世界から来たやつはどうなった？」

「あゝ、なんでも預言の勇者様が表れたとかでもう一人のほうと一緒に丁重にもてなされて今は箱庭の学園に通っているらしい。」

「預言？」

「ああ、なんでも世界が滅ぶのを防いでくれるんだって。」

「ありきたりな話だな」

異世界から来たやつが世界を救うっていうお約束でもあるのか？

「ああ、だけどその異世界人、前の勇者と同じ力を持っているらしいんだ。」

「力？」

「ああ、学園に通うやつらは何かしら特別な能力というかなんだったかな。確か。そうみんな神剣とかいうのを持っている。その剣を使えるのが選ばれた人間だけなんだとか。」

「……………はあ」

どこのファンタジー小説なんだ？  
ありきたりな話しすぎだろ。

まあ少なくとも俺はその二流ファンタジー小節の主人公の位置にいないから帰る手段を探すだけで済みそうだ。

いやー楽でいい。

世界の存亡をかけた戦いだとかはその勇者様とかにでも任せるとしよう。

しかしそうするとどうやって学園とコンタクトをとるかだな、もし

かすると勇者様がいるからもう異世界人はいらないとわれればア  
ウトだ。

フム、そこはもうその学園長の人柄が良いものであることを祈る  
しかない。

ガシヤヤン！！！！

「なんだ？」

そこには俺と同じ年くらいのやつがこれまた俺と同じくらい一つ  
二つくらい年下の女の子のお店を荒らしていた。

「ああ、いつものことだよ変な能力が使えるもんだから力だけは有  
り余ってる。だから化け物退治は奴等に依存するしかないもんだか  
ら逆らえないことをいいことにやりたい放題だ。」

「そうか」

俺は特別な力が使える勇者様とは違って世界救う力なんて持ち合わ  
せてはいない。

——— だけど

「なら助けてくる。」

「あ、おい!」

「へっ、このガキが!こんな不味いものをよくも俺に食わせてくれたな!てめえの——」おい「——ん?」  
バギツツ!!

「ぐぼあっ!?!」

「年下には優しくしようぜ?」

——せめて目の前にいる糞野郎をブツ飛ばす力くらいはあるだろう。

× × × × × × × × × × × × × × × ×

「って、てめえ、何しやがる!!!」

怒気を孕んだ声で不良A(?)が怒鳴る。

だが、こちらはそれ以上の怒気を相手にあびせる

「それはこっちの台詞だアンタこそ何してる。」

「ああ？なんで俺様がいちいち説明しなきゃなんねえんだよ！！！」  
——つて、なんだてめえ異世界人か？」

「ああ、能力なんざつかえないがな。」

「は？つつ、こりゃ傑作だ！！ならてめえは奴隷落ちだな！」

「なに？」

「この世界じゃな、異世界人の扱いは二つだ。英雄か奴隷だ、能力の使えるやつは預言の救世主の可能性があるから丁重に扱われるが、能力の使えないやつは奴隷にされるんだよ。今じゃてめえもあわせて3人しかいないから奴隷なんざこの世界のやつがほとんどだが、昔はそりやあたくさんいてなー、馬車馬のように働かせられてたつて話だ！！！」

「だから、なんだってんだ。」

「だからよう——この将来の英雄様に逆らったからには死ぬより辛いめにあう覚悟しろってことよ！」

瞬間、デカイ火の玉が表れた。

「どうだ驚いたか！てめえは知らねえだろうが、俺様はファイアクリエーターの名で有名なランキング50位の超能力者だ！」

「50位！？」

後ろで少女が驚愕している。

「すごいのか？」

「いいえ、あんなに偉そうにしてたので、てっきりもっと上位かと思つてたので驚いたんです。」

「自称英雄つて言つてるが？」

「英雄なんて10位だいの人達じゃないと言えませんか？」

「つまり妄言と？」

「ええ、質の悪い寝言としか思えません。」

「うわ、ズバツと言つな？」

「案外俺が助けなくてもこいつならなんとかなつたかもな？」

「だとさ？寝言は寝て言つたほうがいいぞ？それともお前、実は頭おかしかつたのか？だったら悪い、俺異世界人だから良い医者のおてがななんだ。」

「ああ、それなら安心してください。あんなのどこの医者に見せても、キチ■イと言われるのがオチですよ。」

「そうか、なら安心だな？」

「ええ。」

なんて話してるうちに相手は顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「てめえら言わせておけばいい気になりやがって！！生きて帰れると思うなよ！！！！！！」

「遺言はそれで終わりか？ならさっさとこいよ？こっちは、とっくに準備できてるんだからさ。」

「ぐっ…死ぬえええええ！！！！」

火の玉が猪の如く突進してくる。

「よっ、と」

それをひらりとかわし、次の攻撃に備え、注意するが。

火の玉は俺を追ってはこずにその火の玉は少女の店を燃やし、その火を吸収してさらに大きくなる。

「……………」

少女は無言で燃える店を見つめる。

「てめえ！」

「アハハハ、どうだ俺様に逆らった報いだ！次こうなるのはお前だ！！！！」

そう言うとき火の玉が化け物の形に変わり、俺めがけて向かってくる。

その速さはさきほどにくらべるまでもなく速くなっている。

「ちい——!？」

それをさきほどのようにかわそうとするが少し、かすってしまった。

しかし、それだけならばさほど驚きはしない。

俺が驚いた理由それはかすっただけの火が拡がり蛇のような姿になり腕に巻きついてきたからだ。

幸いすぐに制服の上着を脱いだからよかったが、これは正直やっかいだ。

あの速さだ、全部避けていたらいつか力尽き、焼かれる。

相手は炎、物理攻撃によるダメージなぞ、望むべくもない。

故に――

「な!？」

それは誰の驚愕の声か

それはどのような原理か。

さきほどまで十メートル以上あったはずの両者の距離が、異世界の男が一步踏み出すだけで、簡単に埋まってしまった。

歩は驚愕で動けない男の隙を逃すはずもなく、その拳を一回、二回、三回と叩きつける。

男はその攻撃の予想外なまでの威力に顔を歪め苦しみ膝について倒れる。

「てめえ……能力が……つかえた……のか……」

最後の力を振り絞るように声を出す。

「失礼な、お前らのようないかさまなしの純粋な体術だ。」

が、歩の答えを聞き届けることもなく男は気絶した。

× × × × × × × × × × × ×

メラメラと燃えていた残り火もようやくおさまり中から黒々となった建物であつたであろうものが姿を表す。

幸い——つと言っても良いのか、近隣の建物には火が燃え移らずにすんだ。

少女は一人その建物であつたものを眺める。

「……………」

俺は何も言えずにいた。

良かれと思ってやったことが裏目にでることなど日常ではよくあることだ。

しかしその代償は凄く大きかった。

家、変わらぬ日常の象徴にして住む人にとっての安らぎの場。

それが燃えて無くなった。

そこにあつたはずの安らぎも、日常も、財産、何もかも。

だが彼女は泣かなかった。

怒りもしなかった。

それがたまらなく歩の心を締め付けた。

いつそ、怒り殴られるくらいされたほうがまだましだっただろう。

しかし彼女はそんなこともせずだ

「ありがとう。」

という言葉をつぎ微笑んだ。

美しいと思った。

切ないと思った。

自分が情けないと思った。

彼の心は決して強くはない。

いや、以前の彼ならば誰に何を言われようが、思われようが、どうなるうが自分には関係ないと、気になどしなかっただろう。

彼にとって自分の回り以外は別の世界。そう考えていた。

ピアニストとして名を馳せたとき、今までなんの感心もしめさなかった親は金づるを見るような目で自分を見る。

回りの大人はまる人が変わったかのような態度をとった。

友人達はあらぬ噂をたてて勝手に軽蔑し、離れていった。

だからピアニストとしての活動をやめれば世界が変わる。

そう思い、日本に来た。

幸いピアニストとして荒稼ぎしていたため生活には困らなかった。

しかしそこにあつたのは絶望だった。

ピアニストとして名は日本に来てもついできた。

ピアノをやめたことをニュースがあらぬことを報道し日本にもそれが伝わっていたのだ。

故に誰も近づかず、話しかけもせず、外国の友人達と同じく、故意に認識することをやめた。

人は他者に認識されなくなったらどうなるだろう？

強いて例をあげるとしたら、幽霊だろう。

幽霊は自分や他者を認識することができが他者から認識されない。

故に幽霊はこの世には存在せず、別の世界のものとされる。

ならば外国や学校での歩は幽霊と同じだったのだろう。

幽霊は生きる人々が何があってもかんしうできないので関係など

ないし、生きる人々にそれは変わらない。

自分はこの人間たちとは関係ない、いる世界が違うのだから関係ない。

そう考えていた。

しかし、その考えが変わり、自分の世界が広がったのは、とある人との出会いからだろう。

その出会いがあつてから彼は女の人に泣かれたり、無理に強がられるのが苦手になった。

そんな経験今までなかったためどうすればいいのかわからない。

それに加え女心というものを理解する力は通常の人間の三倍近く足りないが、今の状況での一般的な反応は心得ているつもりだ。

だが、少女の反応はお礼するという理解不能な反応だったため、歩は混乱した。

そんな歩の心情を悟つてか、どうかは解らないが、少女が口を開く。

「ねえ、異世界人さん？」

「……なんだ？」

歩は黙つて少女の言葉に耳を傾ける。

しかしその言葉はさらに歩の理解を超えるものだった。

「貴方の旅に私も連れていってもらえませんか？」

「はあ？」

もう、ここまでくれば理解しようなどと考えるのも馬鹿らしい。

旅についてくる？

「なんでだ？」

「なんで？つて家がなくなつたからに決まっていますか？」

……………意味がわからん。大丈夫かこの少女？  
ショックで頭が……

「ム、今失礼なことを考えましたね？」

「いや、全然失礼じゃない。むしろ全国共通の考えに俺は達してお前が達せなかっただけだろう。」

「ム、訂正を要求します！私は至って正常で世界的に見ても頭の出  
来は劣らない自信があります！！」

「なら、この世界の常識がどうかしてるんだろ。それにあんたが  
旅について来てもさつきみたいに危険なことがあるし、はつきり言  
って役にたたない。」

「ムム、さらに訂正を要求します！むしろ貴方一人の旅のほうが危  
険な確率は、ほぼ100%！なら私が同行すれば、あなたに言っ  
ていませんでしたが私は魔法を使えます。ですから戦闘面でめ知識面  
でも貴方の旅の役にたつはずですよ。」

「嫌。」

「……………（怒）」

と、少女が不満気に目で主張するが駄目なものは駄目だ。

残念なことに俺は異世界人のため厄介事に事欠かない、何があるか  
解らない危ないことに巻き込むわけには行かない。

しかしその一方で彼女が言うように魔法が使えて（どれほどの力か  
わからないがあまり戦力としては見えないが）、この世界にも詳しい  
ため一緒に行動できるなら安全性は——雀の涙程度には——上  
昇する……………だろ。

という考えに至った。

「じ〜〜〜〜」

「…………えっと。」

「じ〜〜〜〜」

「…………」

「じ〜〜〜〜」

「…………はあ、わかった。あんたの好きなようにしてくれ。」

「わかりました。では同行させていただきますね。」

こうして俺の旅にガイド兼戦闘要員が仲間に加わった。

正直なところ不安ではあったが当面の食べ物やら寝床の心配はしなくて済みそうだ。



第二話

完

## 強きものの世界（後書き）

誤字脱字があつたような……

俺とオッサンとときどきモンスター（前書き）

さらに連続投稿

俺とオッサンときどきモンスター

s i d e 歩

市場の少女【アルフィード・ファン】

通称アルフィーを仲間に加え俺は近くの、【歴史の保管庫トリヌ・セイム】という町の図書館でこの世界についての情報収集をするようになった。

俺らが来た図書館は聳え立つという言葉が似合うほど大きく、とても古い建物で歴史を感じさせ外観だけでも十分に驚くものだったが、中身はさらに驚かせるものだった。

一見、俺の世界の大きな図書館とそう変わらないと思ったがよく見るとSF映画でみるような本がぎっしりと並べられていた。

すると、突然端末機のようなものが目の前まで文字どおり飛んできた。

「え？」

と、俺が呆けているとアルフィーがなにやら操作して、本が二冊飛んできた。

一冊は俺のところに、二冊目はアルフィーのところに来て勝手に開いた。

そこにはこの世界の地図や年表に今まであつた出来事が書かれていた。



「町が違っただけでこうも生活水準って違うのか？」

「はい。だいたいそうです。あの中央都市、つまりあの無駄にでかい城の近くの町ほど栄えています、それ以外の町で繁栄しているのは数少ないです。」

「それってどこだ？」

「1つは勿論この町トリヌ・セイム歴史の保管庫というだけあってかなり厳重に守られていて、三勢力とか関係無くそれぞれの博士達が働いています。そのためこの町は三勢力に唯一属さない町ということでも話題の町です。」

「そうか、それで他は？」

「他はサラヌやミリタリーですかね？あまりあっちの方面には行っただことがないので説明できることも少ないですが？」

「概要がつかめれば問題無い。」

「わかりました。では、」

アルフィーはコホンと一つ咳払いをすると話を再開した。

「サラヌ、正式名称サラナ・ムーヌ三勢力の一つで最も魔法が発展した都市です。主な特産品と言えるものは………スティアですかね？」

「スティア？よくわからないが魔法の国というだけあって何かのマジックアイテムか？」

「はい、そう思ってもらって構いません。スティアは魔法協会が作ったもので鉱石の採掘で発掘した、星命の欠片という宝石に直接魔力と術式を流し込むことで、古代の魔法から現代の魔法まで魔法の適性がなくとも使えるんです。」

「ただし、中々高価なものなので手に入りずらいので少々性能は劣りますが、安価なスティアもあります。ほら、私のこれがそうです。」

「へえ、凄いな。ん？なら、アルフィーは、スティアは入らないんじゃないか？そもそもスティアって魔法の適性がない人のためのものだろ？魔法使いが使っても魔法を覚えたほうが速いんじゃないか？」

「うっ……」

……何か言ってはならないことでも口にしたらだろうか？

この空気は……そう、姉さんが塩と砂糖を間違えたのを指摘したときのような……。

『どっちも白くて粉っぽいんだからいいじゃない！！味なんてたいてい変わらないわよ！！！！』

という発言をされた時はさすがに世界中の料理人に元気をわけくれ、と手を空に掲げたものだ。

まあ、その後結局お馴染み、鉄拳を用いた一方的な肉体言語による会話が始まったんだが………具体的に言えば○龍拳みたいなアップ

ーに始まり、正拳で完璧KOだ。

今思い出すだけで寒気がする、そんな嫌な思い出を引きずりだすほどの警報が脳内で鳴り響いている。

「……ん……です。」

「はい？」

「だから！風系の魔法しか適性がないんです！！」

悪いですか！！

と咆哮をあげる。

「いや、悪くは無いさ。別に俺は気にしない、だから話を進めてくれ。」

むむ、と納得いかない顔しているがこれ以上そのことに関して話をしなくないのか、しぶしぶ話を再会する。

「……サラヌの説明は以上です。次はミリタリーです。ミリタリーはサラヌとは正反対に科学の都市で、研究についての情報は一切あ

りません。わかっていることは軍事力の六割以上が超能力者の学生ということなんです。」

「あの村で会った奴か……」

「はい、超能力は個人の脳の処理速度で決まります。

逆に言えば脳の処理速度が低下していくと、能力の質が下がって行きます。

ですから発達段階であり、まだまだ向上の余地がある中学生から高校生が兵力として重宝されているのです。

そんなミリタリーでは、それぞれ学園の能力者をランキング付けしているんです。その中でも十位代の天才たちの能力は絶大で通常の神剣使いや魔法使いや超能力者が数人がかりで戦っても圧倒、まさに化け物の域です。

勿論、帝国の箱庭学園や魔法協会の能力者もランキングがあります。神剣士も上位の使い手は？から？？の数字を与えられた通称『聖なる加護を受ける者』<sup>ナンバース</sup>と呼ばれたり、色々な二つ名を与えられた魔法使いなどもあります。」

「そんなのがいるから戦争はしないんだな？」

「はい。今のところは停戦条約でそれなりに仲良くやっているみたいです。」

「確かにそんな化け物同士をぶつけたら被害が計り知れないからな。」

「良くて、共倒れ。悪くて壊滅ですからね。」

よくも、まあ、そんな化け物が生まれたもんだ。

そんなのがいても救世主が必要だって言うから驚きだな。

って……

そういえば……

「なあ？」

「はい？」

「それだけの奴等がいるんだから救世主とかに頼らなくても良さそうじゃないか？」

「そうなんですよね……預言は一部にしか発表されていない極秘情報なのでまだ謎の部分が多いんです。」

確かに滅びると言っても、人為的なものか否か定かではない。

仮に人為的なものではない自然災害のようなのだとすれば、三勢力が協力すればどうにかかなりそうなものだ。

人為的なものだったとしてもこれも三勢力が協力すればなんとかなるはずだ。

それほど強大力を持っている三勢力でさえどうにもならないような

ことがあるのだろうか？

なら、【箱庭】にいる救世主や滅びの要因の力は三勢力を凌ぐほどのものなのか？

「まあ、そのことについては救世主に任せて、俺は帰る方法でも探すか。」

「そうですね。私も面倒事は嫌なので、ついてきたのがあなたでよかったです。」

「……それはどうも。」

「嫌味じゃないですよ？」

「はいはい、わかってるよ。さてと、次の本は——」

「——ン……！」

「くっ!？」

「むっ!？」

突如大きな爆発音と共に図書館がぐらぐらと揺れる。

外からは町の人達の声が聞こえる。

『モンスターが攻めてきたぞー!!』

『なんで!なんでここにモンスターが!？』

『騎士団は何をやってるんだ!!』

『きゃ——!!』

「……どうします?」

「はあ、決まってるだろ。“自衛”のために戦うぞ。」

「クスッ、難儀な性格ですね?」

「うるさい、いくぞ」

「はい!」

xxxxxxxxxxxx  
side???

図書館の屋上、そこでボサボサ白髪の白衣の男がモンスターの群れを見つめていた。

「ざつと見て50体か、あちゃ〜これは不味いね〜さつさと処理しちゃわないと上がうるさいだろうな〜」

しかし一人でこの量を殺れてのはきついでしょ〜

かといってここで退散したら上や若い連中に示しがつかないしな〜

まっ、今の姿なら誰も俺だって気がつかないだろうし……………面倒だし逃げるか。

「ん？」

そんな良からぬことを考えていると今回の任務の対称が出てきた。

「おいおい、まさか二人でこの数やるってんじゃないだろうな？若いていいね〜」

しかしここで死なれる訳にもいかないし、片方手ぶらで戦おうとしてるし。

はあ〜年長者は辛いね〜

ここは飛び降りてかつこよく登場したいがその前に近くの武器屋に行く

「おばちゃん！剣一つもらってくぜ！」

「あいよ！あ！お代はいいから頑張ってあいつら退治しとくれ」

「あいよ！」

ほんじゃ、まあ行きますか！

××××××××××××

視点変更

sideアユム

「ちっ！素手で戦うにも限度があるか。」

「風よ、敵を穿つ、槍となれ！」

アルフィーは詠唱が完了し近くのモンスター達が吹っ飛ぶ。

「アユム、これを」

「スティアか！いいのか？」

「かまいません。むしろその“強化”のスティアは素手のアユムに必要でしょう?」

「ああ、すまない。それじゃあ、やるか!」

「はい!」

「はいはい、ちょいまち!」

背中に届くほどのボサボサの白髪の白衣を着たのおっさんが話しかけて来た。

「なんだオッサン今忙しいんだけど、な!」

「と危ない。」

イノシシみたいなモンスターが突っ込んできたのをさっそく強化した拳で倒す。

「オッサン!? ひどいなねえ、オッサン純粹だから傷付くよ」

身をくねらせながいっても気持ち悪いだけだ。

「アユム、敵ってことでいいですね?」

「ああ、死なない程度に殺ってくれ」

「わかりました。ではさっそく――」

「ちょ! 待った。ほれこれやるから!」

そう言つてオッサンが剣を渡してきた。

「オジサンも仲間に加わるやるからサクッとやっちまおうぜ」

“知らないオッサンが仲間に加わった”

「怪我すんなよ、オッサン！」

「ハッ、誰に言つてやがんだよ！」

「来ます！」

するとさきほどまでのモンスターとは違う大型の熊のような（とい  
うかまるつきり熊）モンスターが現れた。

「これが親玉か！」

懷に飛び込み強化した拳をモンスターに叩き込む

が、あまり効いたようではない。

「見た目通り皮が厚つくて硬い！」

「風よ、敵を穿つ、槍となれ！ “ウィンド・ランス”！」

アルフィーが援護で風の槍を六つほど飛ばす。

そこをオッサンが懷から出した双銃で攻撃する。

モンスターも負けじと突っ込んできたがオッサンは余裕の顔を崩すことなく、さきほどの銃ではなくて今度は剣で対応する。

「エイド」！

その言葉通りモンスターの腹はパツクリと斬れた。

かなりのダメージだったらしくモンスターは動けずにいる。

そこを背後からオッサンからもらった剣で脇構えで走り

「風牙」！

一刀両断した。

ノリで技名なんて叫んでしまっただけで恥ずかしい気持ちを抑えつつ間合いをとる。

倒したモンスターは粒子となって消えた、がしかし他のモンスター消えずにまだ残っている。

ゲームとかなら親玉を倒せば他のも消えるんだが

「やっぱ、そんな都合よくいかないか。」

「ですね。」

再び襲ってこようとする、モンスターたちを警戒しながら構えをとる。

『ヴオオオオオ！！！』

数にして五十体、さっきのモンスターよりかはマシだがやはり数の暴力には叶わない。

奇跡的に今日の前にいるやつらを倒せたとしても、まだまだいそうな感じだ。

「まったく若いうちから背伸びするもんじゃないだろ少年？これもいい経験だろ？」

「ああ、良い教訓になったよ。願わくは次にいかせる機会があることを祈るさ。」

「そんな軽口言っていないで二人とも来ますよ！」

三人それぞれ背中を合わせ敵を分担する。

話しているうちに七十体ほど増えただろうか？

合計百二十体、割って一人頭四十体の計算だ。

「じゃ、さきに四十体倒した奴に昼飯おごるってことでいいか？」

「はい！」

「OK」

「じゃ、いくぜ！」

3人それぞれモンスターに攻撃する。

斬る斬る斬る斬る斬る斬る殴る蹴る斬る殴る蹴る斬る  
殴る蹴る斬る殴る蹴る斬る殴る蹴る斬る殴る蹴る斬る  
殴る蹴る斬る

side・オッサン

勢いで来ちまったが

「俺の今の武装は軍用ハンドガン二丁とこのナマクラの剣のみか…  
…」

主武装は研究室に忘れちまったし。

本来ならこの双銃<sup>ナマクラ</sup>だけでも充分どうにでもなるんだか……残念ながら今の俺は能力制限が掛かってる。

能力解放の鍵を忘れちまったもんだから、本来の力は望めない。

まったく外にいたほうが仕事サボってもバレナイし楽だと思って他のやつに仕事押し付けて慌ててきたのが、マズかったか

まあ、どこかの機関が来るだろうからそれまでテキトーにやってテキトーに逃げるとするか

ん？

あれは少年と一緒にいた嬢ちゃんか。

見ると、魔力切れになったのか、もうフラフラだ。

「まだ、まだ、」

だが嬢ちゃんの目は決して諦めていなかった。

諦めが肝心って言葉を知らないんだろうか？

はあゝ若いってのはいいねえつと

「よお、嬢ちゃん助っ人はいらねえか？」

「オツ、サン？」

「ああ、返事はいらねえよ勝手にやつとくから寝とけ」

「か、ぜよ、身を、守る、た、てとなね。」

「なっ！？嬢ちゃん！魔力がほとんどないのに無理すんじゃないよ  
！」

「いいえ、これくらいしかできませんから」

ちっ、まずいのできるだけはやく終わらせるか。

「お前ら、どこからもぐり込んで来たんだか……ま！悪く思っなよ  
お仕事なんでねえ……邪魔者は即排除する……」

「はあはあはあはあ——すう——はあはあ、つたくノルマ越えても昼飯はお預けかな？」

眼前に広がるのはモンスターの群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ！！。

群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ群れ！！。

さきほどの四十体を倒したが一向に減る気配がない。

アルフィーは既に体力気力ともにゼロ。

モンスターの攻撃を受け、意識もギリギリで保っているようなものだろう。

それでもオッサンの援護を辞めないのは最後の意地なのだろう。

オッサンもアルフィーを守りながら粘っているようだがこの数では分が悪い。

俺も体力はほとんど空。

剣を握る手はとうの昔に感覚はなくなり、体のほうもあまり痛みを感じない。

ならとことんやるか……

「はあはあはあはあはあすうーはあはあすうー」

呼吸を整える。

剣を構え

そして踏み込もうとした。

突如。

それはおこった。

『ウオオオオオ！！！』

モンスターがどんどん消えていく。

「なんなんだ…あれ？」

光線のようなものがモンスターを焼き。

先端が鋭く尖った氷が雨のようにモンスターに降り注ぎ

氷漬けにされたモンスターや空の一部が曇りそこから雷が落ちてきて黒焦げになったモンスターもいる。

もう一方では、俺と同年くらいの少人数のやつらがそれぞれ形状の違う剣をもって戦っている。

剣が枝のように別れて同時に複数の敵を倒しているやつや

辺り一帯が爆発させて倒したりともはや戦いとは呼べない一方的な殺戮だった。

倒されたモンスターは粒子となって消えていく。

一気に大量に消えた性が大量の粒子が空へと舞い上がる。

そんな幻想的な風景なのだが綺麗だとは思えない。

「騎士団のやつら、やっときたか。」

「オッサン！」

アルフィーを抱えたオッサンが現れた

「アルフィーは大丈夫か？」

「大丈夫だ。魔力切れで少し眠ってるだけだ。」

「そうか。」

大事にはいたらなくてよかったという思いと

取り敢えず戦闘に巻き込まれない位置に移動する。

その間疲労が一気に押し寄せてきて体が思うように動かなかった。

オッサンのほうは平気そうだから驚きだ

そう言ったら、馴れてるからなと返され反応に困った。

こんなことを馴れるくらい数をこなしてよく生きてるな。

××××××××××××

「ふう〜」

ついに緊張がとけ、その場にへたりこんでしまう。

「終わったね〜いや〜良かった良かった。さすがに今回はヤバかったからね〜」

「それだけ体に余裕があるなら手伝ってきたらどうです?」

「お? アルフィーちゃん目が覚めたか。」

「さつきから気がついてたくせに……そういえば戦いの最中逃げましたね?」

「ああ、逃げるときにちょっとコケてやられそうになったけど紙一重でかわしてやったぜ……。」

「よくもまあ、そんなかつこわるいことをかつこよさげに言えますね！」

アルフィーはオッサンを思い切り蹴ろうとしたがオッサンがヒョイとかわし、アルフィーをばいと捨てる。

なまじ、長身のためそこから落ちたアルフィーは痛そうだ。

「痛たた。」

「失礼する。」

すると、後ろから白で統一された服を着た人が騎士団つばいの人がきた

「えーと、あんたは？」

「はっ、今回の任務の指揮をとっております。騎士団三番隊隊長ヴェル＝サーチエと申します。」

恭しくお辞儀をする姿は童話とかに出てきそうな騎士にそっくりだ。

（いや、本当に騎士だったんだ）

アユムがそう思うのも無理もない、顔は小顔で整っており大人の顔つきではなく童顔で、体全体を見ても細く、剣を振るうはずの腕すらも細い。

本当に大丈夫かいっつ？

と思うってしまうような感じなのだ。

（まあ、雰囲気は優雅な騎士を絵に書いたようなやつだな。）

「それでなんのようだ？」

「はっ！今回の件で一番の功労者である貴殿達にお礼をしたく参りました。」

「野郎のお礼なんざ、いいってそんなもん。それより、俺あ食べ物が欲しい少女Aは？」

「そうですね……まずは貴方を殴らせてもらえませんか？」

「いやいや、そんなことしないでいいって！ほら！一応助けてあげたる？というわけで少女A！君はオジサンを労りなさ——」風よ、我に害をなすものを、圧殺せよ（ぼそ）「——え？、ギャー！？ミンチ！ミンチになるー！？」

「ええとアルフィー？全殺しはやめとけよ？」

「もちろん、五分の四殺しくらいでやめときますよ」

「ああ、もうほとんど全殺しなきがするが、まあいいか」

「いいわけ、ねえだろうが——！？（ミシミシミシ）おおおお！？」

「あ、あの大丈夫でしょうか？」

「ん？ああ悪いな」

「い、いえあのよろしければ近くの基地までおこしになりませんか？見たところ旅のお方のようにですから我々の基地を宿としてお使いになってわ？」

「いえ、それは流石に悪いです。」

オッサンを殺り終えたアルフィーが帰ってきて答える。

顔には血がこびりついてるような気がするが、気にしない。

「いいえ、お気になさらずに、それに我々も異世界の方の話を聞いてみたいですし」

俺の方に熱い視線を投げかけてくる騎士

そしてそれに若干引きぎみな俺

だってなんか嫌じゃないか？

いや、別にへんな意味合いではないんだろうけど。

無意識に体が引いてしまう。

アルフィーはそんな俺を見るとにこりと微笑み。

（ああ、ろくでもないこと言っただろうなー）

直感的にわかってしまう。

それを阻止したいのは山々なのだが残念ながらそんな権利は俺にはなかったらしい。

「そうですか。それならお願いします。」

「了解しました。それではこちら——」「ちょっと待ってください。」

「「え？」」

すると救世主の如く蒼い鎧を身に纏った女性が現れた。

俺とオッサンときどきモンスター（後書き）

あまり見直ししてないから誤字脱字やばいかも

## 横暴（前書き）

中2全開ではじめてしまいちょっと自己嫌悪

横暴

視点 アユム

図書館での戦いを終えた俺たちは、助けにきた騎士団の御好意で基地への誘いを受けた。

俺達は宿無し、金なし、体力なしの三拍子が揃っていたため（俺の意思に関係なく）アルフィーが了承し、いざ基地に行こうとしたところ

紅い鎧を身に纏った女性が現れた。

××××××××××××××

「騎士団六番隊隊長ヴェル」サーチエ」

「ああ、これはこれは箱庭の先生こんな危険ところにどうしました？怪我をしないうちに速くお帰りになったほうがよろしいですよ？」

「ほう、貴様。この私が『？の座』の神剣士と知っての発言か？」

「ああ、？番さんでしたかーいや、失礼しました。この手の事件には『座』の方達はあまり出てこないののでつきり別人かと。それでなんの御用でしょうか？」

あの騎士、顔はスマイルだが目が笑ってない。

とても器用な顔芸だが、正直怖い。

今来た奴が灼熱の炎だとするなら、今の騎士は絶対零度に違いない。きつと、水面下では俺達にはわからない、聞こえない、というか聞きたくない、会話という名の攻防が繰り広げられているに違いない。

「異世界人は箱庭が保護するという決まりであろう？」

「“神剣士”の異世界人でしたよね？見たところ、彼はそれに該当しないと思いますが？」

「それは貴様が判断することではない。」

「ええ、その通りです。」

ですが、それは貴女にも言えることです。

この件は貴女が勝手に判断するべきではない。

本人が行きたいと言うのなら別ですけどね。」

「ちつ、おい、異世界人。」

「なんだ？正直あんた、胡散臭げだからあまり関わりたくないんだが？」

「（ボソボソ）アユム……さすがにストレートすぎるのでは？」

「（ボソボソ）いや、アルフィーはわかってない。」

こういう手合いはキッパリ断らないと、勝手に話が進んでいくんだ。

「

「何が不満なのだ？箱庭に行けば、モンスターに襲われることも宿や食事の心配もない。」

なにより、力あるものがそれを使いこなせなくてどうする？

箱庭に來れば力使いこなせるようになり、もしかすると救世主になれるやもしれんぞ？」

「悪いな、生憎こっちは救世主やら英雄だかなんて興味ないんだ。俺はとにかく元の世界に戻りたいだけだ。」

それに救世主ならもう、あんたらのところにいるんだろ？」

「（！？）なぜそれを……！」

（え？いや秘密にでもしていたのだろうか？だとしたら情報管理が全くなっていないな。

あんな村にまで情報流れていたし。）

「ほお、救世主が？ならばもう異世界人を保護する必要はありませんよね？」

「……有力候補というだけでまだ決定というわけでは無い……。そのため、保護する権利はまだ我々にある。」

「おいおいお嬢さん。そりゃ、ちょっと無理があるんじゃないか？」

すると、圧殺され逝ったはずオッサンが戻ってきた。

「成仏してくれオッサン」

「南無」

「拝むくらいなら最初からやらないでもらいたいんだが……」

「貴様…私を誰か——」

「知ってるさ。」

『？の座』、朱の神剣士、フレア・イニス、だろ？」

「！？」

「戦闘の戦法は突っ込んで殲滅が基本  
まっ、良く言えば真っ直ぐ性格で、悪く言えばただの堅物で融通が

きかなくていろいろと面倒なやつ、

髪の色は紅、神剣の属性は言わずもがな炎。

命令には忠実で、箱庭でも重宝されていると。」

ああ、オッサンってもしかしてストーカーなのか？

ここに来たのもこのフレア？とかいうやつがくるから待ち伏せしてのだろうか？

ヤバイ、少し気持ち悪くなってきた。

良し仕方ないから騎士団のやつらに掛け合ってオッサンを連行してもらおう。

「特別苦手なものはなく、悪く言えば特徴がない。

見た目はとても美人だが中身が堅物のせいで22年間彼氏いる歴は0」

「もう、結構です。

あなたの情報網はとても凄いです、そこまで行くともうストーカーの域ですよ。

ほら、アユムだって騎士団に連行するように要請してますよ？」

「は？そんなはず——なあゝ！？

ストップ！ストップ！少年ストップ！ストーカーとかじゃないから、これ一般教養でならうことだから！」

「彼氏いない歴とかもか？」

「……………」

「連行してくれ」

「了解しました。」

情報網についてはどんな手段を使っても必ず吐かせて見せますのでご安心を」

「拷問するき満々な騎士団に安心できるかッ！

！」

「おい、オッサ——「フリーユージェルだ」

わかった、それでフリーユージェル。

さつきから『？の座』とか言ってるけどなんなんだ？」

「ああ、ま、簡単に言えば箱庭、最強の機関のことだ。

そいつらは主に箱庭ではもうレベルを測定出来なくなった最強の神剣士を集めてできた、機関でな

それぞれその神剣士には？から？？までの数字が与えられ、大きな事件があればそれを鎮圧し。

凶暴な魔物が現れたらそれを無力化する。

まあ、要は殲滅部隊みてえなもんさ。

まあ、実際には命令で動く奴なんてそのの？番くらいだって噂だ。」

「……………（ボソボソボソ）」

「ん？なんだ？」

すると突如俺達の足下に魔方陣と思われるものが浮かび上がり

「！

しまった！！逃げてください！！」

そのまま俺達を拘束する。

「うお！？」

「瞬間転移の魔方陣！？本当、強引ですね！！」

「おいおい、こりゃ噂に違わぬ強引なやり口を生で見れるとは感激だね」

「相手の意見も無視してその力で自分達の意見を強引に押しつける。これがあんたのやり方か？英雄だなんて言われても、自分達の意見が通らないとわかったらその力で黙らせるのか。」

「当然だ。」

私は神に選ばれし者、  
その私の判断に間違いなどありわしない。  
貴様もその仲間に入れるやもしれんのだ、喜べ。」

「はあ、完璧に自分の力に酔ってるのな」

そんな短いやりとりの後、視界が光に包まれ俺達は図書館をあとにした。

横暴（後書き）

視点アユム

世界は広い。

会いたい人間に会える。

それは昔や今の多くの人たちの努力のおかげであることを俺はいつの間にか忘れていた。

それに気がつけたのもこの世界に来たおかげかもしれない。

そりゃ、心から会いたいなんて人間は指で数えるほどしかないが。

今まで会いたくなかった人間にも今ならきつと――。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2186u/>

---

廻る世界で

2011年10月7日15時22分発行